

語り伝えたい京三中生の戦争体験

三中 38 回 辻 宏

昭和十二年七月の日中戦争の開始から、同二十年八月の太平洋戦争終結を経て同二十三年学制改革直前に卒業した京三中生は身をもって戦争を体験した世代である。

その中で我々三十八回生は敗色の濃くなった太平洋戦争の末期・昭和十九年七月に学徒通年動員令により三十六回生・三十七回生・三十八回生と共に総勢四百五十名が愛知県半田市にあった我が国最大の軍用機生産工場・中島飛行機に派遣され海軍機の生産に従事させられた。そして同年十二月七日突如東海地方を襲ったM8の地震に依り、工場が倒壊し、その下敷きになって三十七回生十三名が死亡した。この苛酷な体験に就いては三十七回の諸兄が本記念誌に寄稿されているのでその手記を参照されたい。

平成十年十一月初め半田で一緒に仕事をした高知師範女子部の有志が京都を訪問し、山城高校に立ち寄って“紅燃碑”に献

花をしてくれた事を機会に彼女等と三十六回生・三十七回生・三十八回生有志の交流が行われた。更に相前後して偶然の機縁から三十一回生先輩の同窓会文集『喜寿の集』『傘寿の集』を読む機会を得てその豊富な戦争体験を知った。

この小稿で取り上げた二つの手記は前述の交流によって深められた三中生の戦争体験の一端を後世に伝えたいと念願して寄稿したものである。

その一

三十一回生同窓会誌『喜寿の集・傘寿の集』に掲載の戦争体験に学ぶ

三十八回生の下山茂君がボランティアで二条城の清掃奉仕に参加する中で中西雄太郎さんの知遇を得た。中西さん（京菓子匠若菜屋当主）は清掃活動の発起人且つ責任者で、京三十三十一回卒の先輩でもあった。平成十一年十月三十一回生同窓会は三中卒業六十周年を記念して文集『喜寿の集』を更に三年後には『傘寿の集』を刊行されたが、この二冊が下山君に贈呈されて三十八回生に回覧された事から交流が始まった。

この文集に目を通してみると軍隊生活、戦争体験の記述が極めて多い事に驚かされる。その経歴を辿って見ると、支那事変

（日中戦争）開始の二年前昭和十年に三中に入学し、日米戦争（太平洋戦争）の勃発の前年昭和十五年に卒業し、少数の軍関係進学者を除き大学高専に進学した多数も敗色の濃くなる昭和十八年には理数系を除いて徴兵猶予特権が停止されて海軍予備学生あるいは陸軍幹部候補生から予備士官学校を経て下級将校となり、前線に配備されるのである。徴兵で兵卒として入隊した人も多い。兵種も陸軍・海軍・航空の各分野にまたがっており、配属された戦域も旧満州・ソ満国境・中国本土・ビルマ・インド国境・南方と広大な範囲に亘っている。三十一回生は十五年戦争の大部分を潜り抜けて来た世代である事がよくわかる。

【ビルマ独立義勇軍と南機関】

その中で奥田重元さんの「尊き命永らへて」に特に注目した。この手記は勿論深い感銘を受けた事もあるが何よりもこの十五年戦争の真実を知るヒントを与えて呉れたからである。

この手記は奥田さんが外務省情報部から特務機関「南機関」に派遣され情報将校としてビルマ独立義勇軍（BIA）を指揮して日本軍のビルマ攻略作戦の先鋒を勤めた。又後に同じく特務機関「光機関」に派遣されインド国民軍（INA）を指揮してインパール作戦にも従軍した時の体験記である。

ここで「南機関」に就いて触れて置くと、アジア諸民族を西欧帝国主義の支配から解放するという日本の国策に従って

一九三〇年に陸軍參謀本部が中野学校出身の鈴木敬司大佐を機関長として設立した特務機関である。太平洋戦争の勃発する一九四一年頃には厳しい訓練に依つて後のアウンサン將軍を中心とするビルマの青年志士達三十人を鍛え、独立義勇軍に組織していた。「南機関」は「日本軍がラングーンを占領した後はビルマの独立が約束される」と彼等を鼓舞していたのでビルマ攻略戦が開始されると奥田さんの指揮のもとに彼等は勇敢に戦い、尖兵としてラングーン突入に成功し、その攻略占領に貢献した。

所が戦後刊行された太平洋戦史を注意深く研究すると驚くべき事実突き当たる。ラングーン占領後に独立が実現しなかっただけでなく一九四二年ビルマ第二の都市マンダレーが陥落してほぼ全土を掌握する段階になつても約束は果たされず、その為に独立義勇軍の意志と主体性を尊重して育成指導に当たつて来た「南機関」と軍上層部とは衝突対立を深め、遂に「南機関」は解散に追い込まれる。軍上層部は代わりの指導將校を派遣して、その主体性を否定し、単なる補助部隊として扱うに到つた結果、軍と独立義勇軍との関係も悪化する。

この事実は何を物語るのだろうか。

日本の国家と軍の指導層が掲げた「アジア解放の聖戦」なる

大義は偽りであつた。ビルマではバーモウを主席とする傀儡国家と日本軍の手足となる傀儡軍を作り、支配下に置く事が真の目的であつたのである。

一九四四年三月より日本軍が国運を賭けて発起したインパール作戦に大敗北を喫し、体制を立て直そうとしたイラワジ会戦にも敗退してビルマ戦線が全面的に崩壊する末期の段階になると独立義勇軍は反乱を起こし、一斉に日本軍を攻撃し自らの力で独立を目指す方針に転換するに到る。

【アジア解放の大義に忠実だった軍人】

然しこの戦争の第一線で戦った軍人の中には「民族独立を支援する聖戦という大義を信じ忠実であつた軍人の存在した事も事実である。奥田さんはその生き証人であろう。」

奥田さんはラングーン突入時の様子を「生還など思いもよらぬ激戦の生死関頭の中で、アウンサン將軍をはじめビルマの青年志士達との間に育まれた戦友愛・同志愛は兄弟愛にも勝る温かな、濃密なものとなつていた」と語っておられるが、これは双方の間に培われた深い信頼関係を物語るものである。

又、一九六八年三月、ロンドンで刊行された前大統領モンコン博士著の『ビルマ独立史』から「一九四二年三月七日、若き日本人将校オクダに率いられたラングーン突入隊四十名のB I A将兵が、ミンガランド（ラングーン空港所在地）に出現した」

の記述を引用し、自分の大きな名誉であり、誇りであると強調されているが、これはB I Aの将兵がラングーン攻略を自らのビルマ解放の戦いと意識していた事を示すと共に献身的な独立支援の友・同志としてオクダさんを評価していた事を物語るエピソードでもある。

戦後奥田さんはかつてのB I Aの同志達によって達成されたビルマ政府に顧問として迎えられ枢機に参画する機会を得た事を述べ、命ある限りビルマ（ミャンマー）との親善関係の為につくしたいとも述べておられるのである。

【敗戦とその惨状】

奥田さんは一九四三年夏に対インド工作機関「ひかり機関」に転属し、インド国民軍将兵（I N A）を指揮して英印軍陣地に接近し、インド兵の寝返りをはかる特殊工作任務を引き受ける。

日本の起死回生の運命をかけたインパール作戦は一九四四年三月に発起されるがI N A特殊工作部隊は、京都編成の祭兵団と行動を共にする。

周知の様にこの作戦は日本軍の大敗北に終わる。I N A部隊も京都兵団と共に壊滅状態に陥るのである。

ここでI N A部隊に就いて簡単に触れて置こう。この部隊はスバス・チャンドラ・ボース氏が日本に頼って英国の支配を絶

ち切つて独立印度政府を樹立する目的でマレー攻略戦で捕虜になった印度兵士を集めて結成した部隊であり、その司令官となった。彼は独立印度国軍としての形を整え基盤を固める為、日本軍が占領したアンダマン・コタバル諸島の統治権の委譲を要望したが、承認されなかった。

日本軍がインパール攻略を計画している事を知り、若しアッサム地方が解放されるならば、独立の第一歩となる東部印度自治政府を設立しようと、INA部隊の全兵力を投入する決心をするのである。然し結果は惨憺たる敗北に終わった。

スバス・チャンドラ・ボース氏は帰日の途中台湾で飛行機事故に遭い、あえない最後を遂げる。

奥田さんは戦闘の現場に向かう途中、印緬国境の山岳地帯で奇跡的に京都兵団に属した実兄（三中二十六回卒）と再会された事にふれ、別れの際くしかえし語りかけられた実兄の「重元、絶対に死ぬなよ。元気で京都へ帰ろうね」との言葉を紹介されており、深く胸を打つ。この実兄も帰らぬ人となった。

三年後に文集二号「傘寿の集」が刊行されたが、奥田さんは再度インパール戦に就いて手記を掲載している。追記では「補給を全く閉ざされた日本軍は飢餓状態に落ち入り、アッサム・印緬国境山岳地帯の豪雨に泥まみれになり、マラリヤ・赤痢等

の悪疫に襲われて犠牲者が続出し敗走路は「地獄街道・白骨街道」等の文字の示す通りの屍臭絶ゆる処なき惨憺たる様相を現出するに到った事」を強調されている。

戦後京都新聞が連載した「防人（さきもり）の詩（うた）」には京都兵団の生き残りの将兵の証言を多数掲載してその惨状を伝えているので、奥田さんの手記を補完する最良の参考資料として一読される事を推奨したい。

【インパール作戦の実相と教訓】

インパール作戦を発起するに当たって牟田口第十五軍司令官は太平洋戦争初期の香港・マレー・シンガポール攻略戦で英印軍を一蹴した経験から敵を過小評価し、精神力でジャングル山岳を一気に突破して背後から白兵突撃で急襲すればインパールは陥せると過信していた。

然しインパール戦での英印軍は全く別軍であった。強力な空軍で制空権を握り、空からの大量補給を絶やさず、兵器・兵士の戦力の集中、円筒型といわれる強力な陣地の構築等迅速に出来た。そして日本軍の背後を攪乱する戦術を駆使し、我の動静を逐一正確に掌握していた。

インパール防衛陣地では戦車を配置・圧倒的な火力で重装備し、日本軍を迎え撃って壊滅できる軍隊に変身していた。

英印軍の反抗の時期と規模や、その戦略戦術の実相を全く認

識していなかったのは現地十五軍だけではなかった。戦史はインパール作戦が決定される過程を明らかにしている。作戦が提起された当初、現地十五軍はじめ、ビルマ方面軍、南方軍、大本营に到る各級機関の幕僚陣営内の多数は作戦に反対であった。それは印緬国境の地形が險悪（山岳・ジャングルの連続）であり、雨季には全土が水浸しになる劣悪なビルマの気象、悪疫瘴癘の湿地帯を内包する等の悪条件の為、補給が作戦に追いついて来ないという客観的合理的な判断に基づくものであった。

所が戦争指導を司る東条首相（兼陸相）や杉山參謀長等の最高責任者の間には日々悪化する戦局の好転・光明を見いだそうとする願望があった。一方、河辺ビルマ方面軍司令官は日中戦争（支那事変）の発起点となった蘆溝橋事変の際、旅団長（河辺）と連隊長（牟田口）であった旧知の関係から部下に名をなさしめたいという温情を内包していた。

こうして軍事的合理性よりも上級指導者の主観的願望と温情主義が優先されて牟田口十五軍司令官の冒險主義的無謀な作戦が許容されたのである。

昭和十七年八月からのガダルカナル戦、それに続くニューギニア戦の敗戦から教訓を引き出す事なくインパールで同じ誤りを繰り返すことになった。

“敵を知り、己れを知らば百戦危ふからず”……孫子の教え

は生かされなかった。

戦後六十年の節目に当たって、太平洋戦争を指導した最高国家責任者の非合理や無責任性、日本軍の体質の本質を改めて認識し、教訓を引き出して置く事の大切さを痛感させられた。

我々は三十八回生の戦争体験「学徒動員五十年」を先輩に贈呈して目を通して貰う事にした。「喜寿の集」の読後感想文も副えて置いた。

間もなく奥田さんからの返信を戴いた。その中に「戦争体験は必ず後世に伝えようではないか」との呼び掛けがあったが、「肉親や同窓生の死を無駄にしたくない」との心情がズシッと胸に伝わって来たのであった。

（参考文献）

防人の詩

京都新聞社

日本の七十年戦争

丸山 静雄著

新日本出版社

太平洋戦争（下）

児島 襄著

中公新書

失敗の本質 日本軍の組織論的研究

戸部良一他五名著 ダイヤモンド社

太平洋戦争史論

藤原 彰著 青木現代叢書

その二

半田学徒動員の仲間達、 半世紀ぶりに一堂に会す

一、〃紅燃碑〃に献花

平成一〇年一月一日の午後の事である。元京三中三六回生三七回生、三八回生の有志達と元高知師範女子部本科生有志達が、戦後五三年を経て山城高校庭に相集い「紅燃碑」に献花した。

三七回生の一色さんは「半世紀も過ぎたと言うのに高知から遙々訪ねて戴き、花を手向けてくださった事は感謝の気持ちで一杯です。亡き一三名の友もさぞかし感激し喜んでくれている事でしょう。」との挨拶を述べた。これに対し高師生の堀見さんは「懐かしい京三の友に再会できた上に、紅燃碑」に献花出来た事、無上の喜びです。」との答礼の挨拶を述べた。この光景の中には半世紀を過ぎて尚途切れる事のない友情と共通の体験に基づき深い心の絆を感じさせた。

二、太平洋戦争下、半田の軍需工場での出会い

昭和一九年七月五日、京三中五年生、四年生、三年生総員四五〇名は通年学徒動員令の施行に依り、學業をなげうって愛知県半田市に赴いた。当地の中島飛行機で海軍機「天山」「彩雲」の生産に従事する為である。それより半年遅れて昭和二〇年一月に高知師範女子部生が到着し同じ職場に配置された。そこでおもいがけない事が起こった。京三中三六回生と、高知生が「天山」組立ての現場でペアを組んで仕事を始めたのである。

当時昭和一桁生まれの世代は「男女七才にして席を同じくせず」と言った封建的觀念に縛られていた。中等学校以上は男女生徒は隔離され、町中で男女交際が監視官に見つかれば学校に通報され、不良行為として処罰された時代である。

戦後になって刊行された学徒動員の記録「夏雲の彼方に」の中で、高師生はその時の昂揚した感情を次ぎの様に書いている。「男子生徒とペアで仕事出来るなど思いもしなかった。それも憧れの京都三中とあって仕事に張りが出て毎日が楽しかった」と。

一方前年一二月の東南海地震で犠牲者を出した京三中の気持ちは荒んでいた。三六回生は卒業を控えて暗澹たる気分であった。軍関係以外は進路に希望が持てず徴兵猶予特権が取り消されて何時召集されるか分からない不安状態に置かれていたからである。彼等も「高師生の素朴で明るい姿に接しられた事は心

の救いであつたし、戦後もずっとわすれなれなかつた」と述懐している。

昭和六〇年前後の頃だろう。双方の消息が判明するや直ちに再会の話が進んだ。以後京都と高知で交互に訪問し合い、今回が八回目という事である。

三六回生で外山司郎さんも半田の出会いが忘れられなかつた一人である。偶然のきつかけで五六年振りに高知訪問を果たし、高師生の歓迎を受けた外山さんは帰郷後直ちに「土佐紀行―そして半田の思い出」と題する紀行文を出版し、その中に再会の喜びを託した。

三、三七回生の悲惨な体験と“紅燃碑”

三七回生も「天山」の組立であり共通の作業であつたが、主力は山方工場の胴体組立に配置されていた。昭和一九年二月七日のM8の東南海地震は、山方工場を瞬時に倒壊させ下敷きになった一五三名、その内動員学徒九六名の人命が失われた。

三七回生はこの時一三名の痛恨の犠牲者をだしたのであつた。彼等は戦後一二月七日を追悼の日と定め同窓会を開催し今日に到っている。更に平成六年五月には自ら出し合つた基金で母校山城高校庭追悼の慰霊碑を建立し、**“紅燃碑”**と命名した。

こうして史実が後世に伝えられる事になった。

三七回生には忘れられないもう一つの思い出がある。

山方工場の倒壊で重傷を負いながら奇跡的に一命を取り止めた三宅さんは緊急の病棟に当てられた半田高女の校舎に収容された。

半田高女は動員学徒中最多の二八名の犠牲者を出し大変な事態であった。それにも拘わらず身内同然の親身な介護を受けた。双方の固い心の絆は今日迄連綿と続く交流に表れている。

四、三八回生、戦後五〇周年記念「半田平和式典」に出席、 高師生と交流

平成七年七月、半田市民の実行委員会が中心になって半田市の後援の下に雁宿公園に於いて終戦五〇周年を記念する平和式典が開催された。京三中からは三七回生（遺族を含む）と三八回生の有志二七名が参加した。この式典の中心行事は東南海地震、半田大空襲等の犠牲者全員を記名した平和祈念の慰霊碑の除幕式にあったが、学徒派遣六十八校を代表して京三中と高知師範女子部が追悼の辞を朗読した。式典後の懇親会で挨拶を交換した三八回生と高知生は戦後になって刊行した夫々の学徒動員記録「学徒動員五〇年」と「夏雲の彼方に」を交換して交流

の度を深め、双方の地を相互訪問して「平田を語る」懇親会を開く迄に到ったのである。

冒頭に記述した・紅燃碑・献花の行事は当時入浴した高師生と三六、三八回生有志が三七回生に呼びかけて実現した。彼等は献花式の準備を整えて出迎えてくれた。

五、「平田を語る夕べ」於私学共済会館

山城高校での行事を終えた高師、36回、38回の一行は紅葉の懸ヶ峯の光悦寺を訪れ見学した後、高師生の宿泊所南禅寺近くの私学共済会館に向かい、ここで夕食を共にして懇親会を持った。半田での思い出を夫々交換する中で三申側からは三十六回生谷口さんが工場内で突発した一つの出来事を紹介した。引率教官であったM先生が海軍監督官から暴行を受けそうになった事が起きた。その場にいた三十六回生が果敢に裁ち上がった反撃し、阻止したエピソードである。

当時工場内は海軍警備隊の監視下に置かれ、工員（徴用工、学徒を含む）の作業態度がサボタージュと見なされると情け容赦なく精神棒で叩きのめされる状況下であったから、この抵抗は極めて勇気の要った行動であった。

三十六回生の外山司郎さんは前述の著書の中で二首の和歌

寮の前シヨベル振り上げ海軍士官をば

取り巻く意気は京三でこそ
常日頃無視していたる教師でも

そは許すまじ士官のいぢめ

を詠み、この果敢な行動を記録している。

一方、高師側から一つの片岡さんから秘話が明かされた。恐らく昭和二〇年二月、三月頃の事であろう。地震で倒壊した山方工場の一隅で撮影された記念写真で三中三六回生と高師生が一緒に記念写真の事である。これは「夏雲の彼方に」に戦後初めて公開された。

どうしてこれが目の目を見たのか？

当時軍需工場へカメラを持ち込み撮影するなど危険極まる行為であった。憲兵に見つかればスパイ容疑で即検束である。学校当局に察知されれば重い処罰必至であった。

その時高師生の引率教育であった―先生がカメラとネガを預かり、自己の責任で戦後迄秘匿し通したのであった。

六、山城高校の後輩達に訴えたい事

京三中の三〇回前後から三九回に到る卒業生は均しく一五年戦争の苦難を潜り抜けて来たいわば現代史の生き証人である。

今や老境に入ったこれらの世代が強く望んでいる事は後輩諸君がもつと現代史に興味を持って欲しい事である。我々生きた証人の体験から教訓を汲み取ってもらう事はその橋渡しになると思います。

昭和二三年、六、三、三制の学校制度が施行され、小学校から大学に到る迄男女共学となりました。

後輩諸君は至極当たり前の事としてこの制度を享受しているわけですが、この小稿で取り上げたテーマは戦前に於いては男女生徒の交流という当たり前の事が戦争を指導する体制側からの強烈なイデオロギー的締め付けと処分という重圧をハネ除けて闘う強い意志と連帯感がなければ実現しなかった事実を汲み取って貰えれば幸いです。

最後に前記の京三中世代が後世に伝えたいと念願して書き残した記録を紹介して置きます。

① 喜寿の集 三一回卒業六〇周年記念誌

傘寿の集 同 傘寿記念誌

② 土佐紀行 そして半田の思い出 36回 外山司郎

③ 紅の血は燃ゆる 学徒動員の記録 37回 記録編集委員会

あゝ、紅の血は燃ゆる 37回 渡辺一雄

④ 青いつばさ 38回 安藤一郎

精一杯生きていた ― 戦中・戦後の記録 ―

38回 卒業生幹事会編

学徒動員五〇年 ― 続精一杯生きていた ―

38回 学徒動員刊行委員会

以上

平成一六年一〇月三〇日 三八回生 辻 宏



山城 田 伊藤信子